

令和7年度第1回「みえ現場 de 県議会」 若者とこれからの地域づくり～防災・減災～ 実施概要

1 日時・場所 令和7年10月29日（水）18時00分～20時00分
四日市大学 1号館2階121教室ほか

2 テーマ 若者とこれからの地域づくり～防災・減災～

令和2年の熊本豪雨や令和6年の能登半島地震、令和7年9月の四日市市での大雨など、近年、多くの大規模災害が発生し、激甚化、頻発化の傾向が強くなっています。また、今後30年以内に60%～90%程度以上の確率で南海トラフ地震が発生し、甚大な被害が生じると予想されており、災害対応における「自助」「共助」「公助」それぞれの充実・連携が求められています。発災直後においては「公助」が全ての被災地や被災者に及ばないことが想定され、「自助」や「共助」の充実が重要と考えられています。そこで、「共助」の担い手として期待される若年層の方を中心に防災・減災について意見交換を行い、今後の県議会での議論に反映させていきます。

3 参加者等

- 県内在住・在学の方（15～39歳程度） 12人
　・地域防災や被災地支援の活動に参加している方など 9人
　　（大学生8人、社会人1人）
　・地域防災活動を支援する大学等関係団体の方など 3人
- 県議会議員（下線は広聴広報会議委員） 10人
　広聴広報会議座長（副議長） 森野真治
　防災県土整備企業常任委員長 龍神啓介
　広聴広報会議委員 荊原広樹 伊藤雅慶 喜田健児 松浦慶子
　　　田中祐治 辻内裕也 山内道明 難波聖子
- 傍聴者 6人

4 プログラム

- (1) 開会あいさつ
- (2) オープニングトーク
- (3) グループ意見交換
- (4) 全体交流
- (5) 閉会あいさつ

5 主な意見等

◇オープニングトーク 四日市大学副学長 鬼頭浩文教授

- 東日本大震災後に団体を立ち上げ、学生とともに支援活動を始めた。県内外の被災地に出掛け、令和7年1月には100回目の活動を輪島で予定している。
- 被災者との交流会を行うとき大人だけでなく学生が参加すると、孫の顔に重なるのか参加者が増えるし盛り上がる。若者にはそういう力がある。
- 高校生を対象とした県教育委員会の防災ボランティア事業にも協力しており、高校生とともに被災地で支援活動を行っているが、参加生徒はとても意欲が高い。
- 三重が育てた防災に強い人材として国内外で活躍してくれることを想像しながら一生懸命汗をかいて活動している。
- 災害ではあらゆることが起きる。被災者には障がい者や高齢者、認知症の方、妊婦さんなどもいる。季節や時間帯によっても状況が異なってくる。被災地支援には多面的な知識が必要になる。
- 学生たちにとって今回の企画は、自分たちが住むまちで災害が起ったときどうかわるかというのを考えるよい機会。
- 議員の皆さんも学生と話す中でさまざまな気づきがあると思うので、この機会を通じてぜひ議会で発信していただきたい。

◇グループA

【共通話題1】 私たちのまちで大規模災害が起ったとき、私たちに何ができるか

*地域性を踏まえた取り組み

- 海沿いだとまず津波から逃げることに、内陸の地域だと津波からの避難者の受け入れも想定して、炊き出しや避難所運営の訓練に力点を置いている。

*消防団活動のために

- 地域の住民と消防団は顔の見える関係。身近に消防団があるのは安心感がある。

- 家族が無事でないと消防団活動はできないので、ふだんから備えをしっかりとしておくことが大事。

*デジタルとアナログ

- 防災アプリは県と市町両方の情報にリアルタイムでつながるとよい。

- アプリの画面が見づらい人には、スピーカーマークを押すと画面の内容が音声で聞けるようにするといのではないか。

- 若い人がアプリを使って情報を集めて避難所の皆さんに伝えるという方法もよいのではないか。

- 既存の資源を使ってアナログ的な部分で支援を考えることも大切。地域で回している回覧板を活用し、ハザードマップに避難所を書き込んで回したりしている。

*外国人への対応

- 防災避難用語は難しいので、「高いところに逃げる」「あそこの幼稚園に逃げる」など簡単な日本語や映像で説明するとか、この音がしたら逃げるということを事前に伝えておくとかするとよいのではないか。

【共通話題2】 大規模災害に備えてどんな準備をすればよいか

*子供のころから防災活動に親しむ

○三重県の小中学校で使われている「防災ノート」は他県からの評判が良い。これによって県内の子どもたちの防災意識は他県より高いのではないか。

○みえ学生防災啓発センターに参加した人たちに聞くと、防災に直接かかわりたい人だけでなく、先生から進められてという人も多い。小中学校からの薄い防災意識を持っているからちょっとの後押しで参加するのではないか。

○教員だけでは限界があるので、学校に防災の専門家を招いたり、グループワークを取り入れてみたりしてもよいのではないか。

○地域のお祭りで炊き出しのわかめごはんをつくったり、公園のベンチに防災機能を持たせたりしているところもある。

*防災活動へのインセンティブ

○就職活動で自分のアピールポイントになるといった形で活動紹介して仲間を増やすのもきっかけとしては大事ではないか。

○定期的な活動報告会など、興味を持ってもらえるような広報活動を継続的に行うこともよいのではないか。

○支援活動そのものだけでなく、現地の美味しいものとか景色のいいところとか、現地の魅力も合わせて経験できる形にすると継続するのではないか。

*消防団への参加

○近年、消防団員が減少している。学生消防団や女性消防団をつくったり、学生消防団活動認証制度をつくって就職活動に活用してもらったりしているが、新規参加が少ない状況が続いている。

○消防団の活動は危険だとか、部外者は入りづらいとか、飲み会が多いとか、そういうイメージがある。

○女子学生が地域の分団に入って文化がガラッと変わったことがあり、最近は女性を積極的に入れる分団が増えてきている。実際に被災地に行ったときに女性団員がいることでプラスになっていて、すごく評価されている。

○親には、最初に具体的な活動をしっかりと説明できると理解してもらえる。

◇グループB

【共通話題1】 私たちのまちで大規模災害が起こったとき、私たちに何ができるか

*自助、共助の必要性

○家屋の倒壊で骨折して数日後に防災ヘリで病院に運ばれたという例があるよう
に、発災直後は自分や周りにいる人たちで助けるしかない。

○災害時に看護学生を看護師の下で安全にボランティア活動できるプログラムを
考えている。

○東日本大震災のとき、避難所で食事を配る際にけんかが多かったところで、小
学生がみんな並んでくださいと声を上げると並ぶようになったと聞いた。子ど
もってすごい力を持っている。

*心のケア

○能登では、被災者に足浴をしてもらったり、お茶会をしたりといったボランテ
ィア活動を行っている。家族を亡くされたりしており、雑談でもよいので心の
ケアになればと思っている。

【共通話題2】 大規模災害に備えてどんな準備をすればよいか

*避難のシミュレーション

○災害が起こったときにどんなことが自分の周りに起こるのかを知っておくべき。
家族で、あるいは地域のみんなで防災マップを見ながらどう逃げるかなど考
える場をつくる。

○行政からの要請に基づいて地域や組織別の防災マニュアルをつくっていても実
際に動けるかどうか。それをもとに訓練してみて見直しをしていく必要がある。

○HUG（ハグ：避難所運営ゲーム）はさまざまな場面や人物の設定などでき
るので、ぜひ活用してほしい。

*若者・子どもと地域コミュニティをつなげる

○能登での支援活動では、地域の人の関りがすごく強いと感じた。避難所に集ま
って誰がいないとか家族じゃなくても分かるのはすごい強み。

○地域でごみ拾いをした後、お疲れ様ということで、防災用で期限が近い飲み物
を配ったりしているが、飲み物もらえるならと子どもが親についてくること
があり、いいつながり方だなと思っている。

○自分の住んでいるところでは地域の文化祭という催しがあり、そこで炊き出し
やってみようとか、防災につながる要素を入れてみてもよいのではないか。

○夏祭り会場は避難場所でもあるので、楽しい思い出とともに避難経路を覚える
ことにもつながる。

*障がい者や高齢者等の避難

○行政や地域の中で組長さんとかが当事者の意思を確認するとか、名簿をつくっ
て担当を割り振るとか考えられるが、近年個人情報というところで難しくなっ
てきてている。

*避難生活の質を保つ

○避難生活において、衣食住が保たれないと命をつなげるのが難しくなってくる。
○まずは自分自身で備蓄する。そして備蓄が無理だったときは、たくさん備蓄で

きた方から分けてもらって食事面で配慮していくことも共助として必要ではないか。

○指定された避難所に地域住民が全員入れるのか確認すべきではないか。

○災害時は避難所でも上下水道が止まる可能性がある。水が無くてもトイレが使えるよう、ビニル袋や折り畳み式トイレなどの備蓄が必要。合わせて衛生面から手洗いできるポリタンク水や消毒液などもセットで。

*空き家対策

○崩れた家が空き家で、修復するには所有者の許可が必要で、それに時間がかかることがある。

*観光客の避難

○三重県は観光地が多く、災害時、住民だけでなく観光客の衣食住も踏まえた避難対策も必要ではないか。

○住民・観光客それぞれ外国人も含まれるため、外国語や宗教なども考慮した対応が必要ではないか。

◇全体交流（総括コメント） 四日市大学副学長 鬼頭浩文教授

○意識が高く、知識も豊富で、若者らしい、行政や議員からは出ないような意見がたくさんあった。

○災害に遭ったとき、避難所などで動ける若者はとても多い。加えて被災地支援の経験があったり防災士の勉強をしたりした若者は、大規模災害が起こったときに頼もししい人材として活躍してもらえると思う。

○県議会議員は三重県全体をみて災害について考えを馳せる立場なので、今後も継続的に若者と関わる機会を持っていただければと思う。

令和7年度 第1回「みえ現場de県議会」 若者とこれからの地域づくり～防災・減災～

アンケート結果

○当日の参加者・参加議員・傍聴者 28人

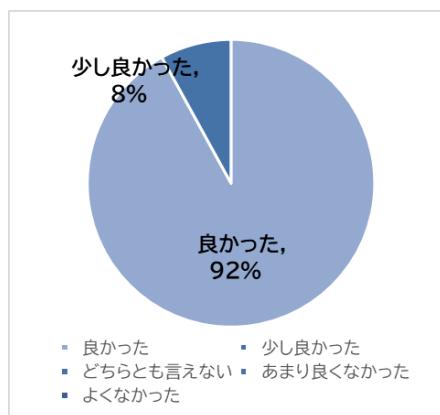
《内訳》
・参加者 12人
・参加議員 10人
・傍聴者 6人

○アンケート回答者 13人

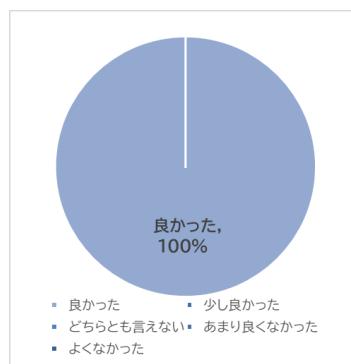
《内訳》
・参加者 11人 (回答率 92%)
・傍聴者 2人 (回答率 33%)

Q1 本日の会議の感想をお聞かせください。

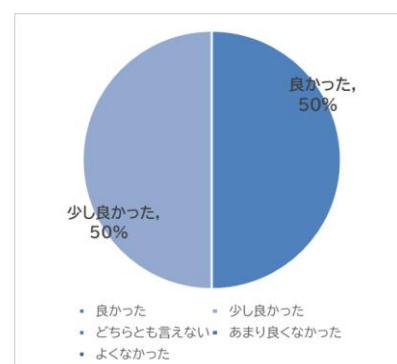
<全体（参加者+傍聴者）>



<参加者>



<傍聴者>

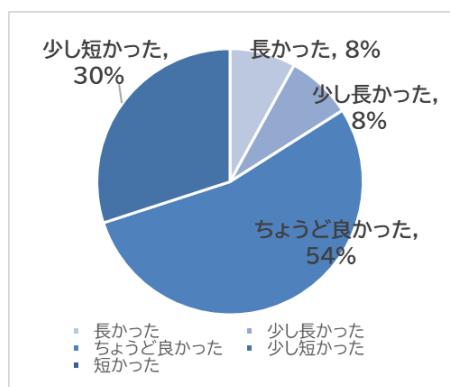


Q 2 本日の会議について、お気づきの点がございましたらご記入ください。

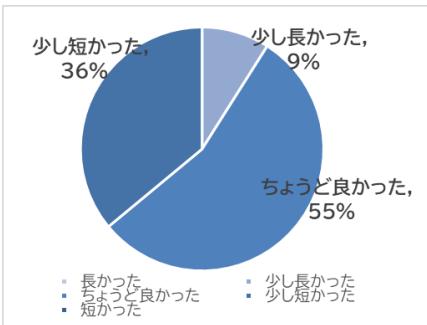
- ・自分ではあまり考えないような議題を考えるきっかけになりました。
- ・普段聞くことができない貴重な意見を聞くことができました。
- ・防災活動をしている中で、思っていたことを届けられてよかったです。
- ・話しやすい空気で、さまざまな視点から話題を出して頂き、とても実りのある時間でした。
- ・明るい雰囲気で緊張していたのですが、しっかりと意見をお伝えできました。
- ・自分が言ったこと（災害時の建物の持ち主など）を熱心に聞いていただいたのはすごく良い経験になった。
- ・三重県の防災対策について知らなかったことがたくさんあり、非常に勉強になった。
- ・話し合う時間が長くあったので、いろいろな話を聞けたり、自分の意見の気になるところを訪ねてもらったりして楽しかったです。
- ・議員の皆さんと各々の視点で密に話せました。具体的な支援方法について話し合うことができ、学生として大変勉強になりました。
- ・学生さんの率直な意見が聞けて良かったです。
- ・意見交換は、進行役の県議の力量によって中身の濃さが違っていた。
- ・学生の声をもっと聞きたかった。

Q 3 本日の会議の時間の長さについて、適切であったかお聞かせください。

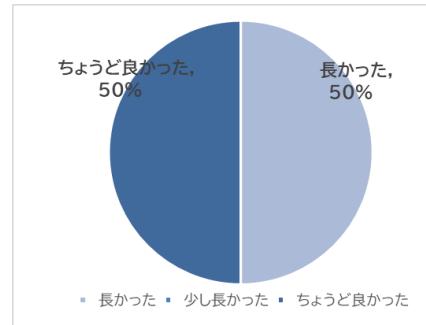
<全体（参加者+傍聴者）>



<参加者>



<傍聴者>



Q 4 今後の「みえ現場 de 県議会」の開催テーマ・開催場所などについて、
ご提案がございましたらご記入ください。

- ・学生へ流してほしい情報等ございましたら、また教えていただけすると嬉しいです。
- ・部活動の地域移行
- ・ひきこもりの支援をどうしていくか